

資料紹介…木造昶『鹿兒島役従軍日誌』

—西南戦争に従軍した政府軍・別働第二旅団遊撃歩兵第一大隊兵士の日記—

大谷 正

専修大学文学部教授

—はじめに—木造昶と牧為助について—

本稿は筆者が古書店より入手した官軍兵士（別働第二旅団所属）の西南戦争従軍日記—木造昶『鹿兒島役従軍日誌』—を翻刻して紹介するものである。

『鹿兒島役従軍日誌』の体裁は、縦二四センチ、横一六、八センチ、表紙には「鹿兒島役従軍日誌 全」という題箋がある。中身は四五丁で、日記本文が三七丁にわたって記され、残り八丁の内、七丁には「明治十年征南之役摘要」など雑多な記述が見られ、一丁は白紙である。本文は一行青罫紙が使用され、罫紙には耳の部分に「松濤館」と印刷されている。本稿では紙幅の関係などから、日記本文の三七丁のみを翻刻する。

1 日記の記述にあるように、木造昶は西南戦争開始時点では、名古屋鎮台所属の陸軍曹長である。日記は木造が西南戦争に従軍後整理したと推測されるもので、記述自体は簡明なものである。筆者が入手した『鹿兒島役従軍日誌』

は木造昶の自筆本ではない。日記末尾に、「名古屋区八百屋町二丁目牧兼次郎方 牧為助」と記されているので、木造昶の日記を後日、牧為助という人物が写したと考えられる。『日本歴史地名大系』（平凡社）の記述によれば、「名古屋区八百屋町二丁目」は現在の名古屋市中区錦二丁目と栄二丁目にあった旧町名で、古くから名古屋の有力商人が店を構えていた地域である。

また、この日記には半紙一枚が挟み込まれており、それには日清戦争あるいは日露戦争に従軍した時の、中国東北部の小規模な兵站司令部と野戦郵便局を描いたペン画および筆で書かれた和歌とその解題が記されている。文字の部分を翻刻すると下記のようなものである。

「夕の司令部（この部分のみペン書き―筆者注）」

糧はこぶあまた車の出でさりてちまたしづけき夕暮のそら

遣外堡子

午前中ハ殊に多数の支那車輛集合して雜擾極りなし、夫ニ荷物を積みいで去れハ俄に静閑なり、殊ニ夕刻ハ寂寥と称するもまた可なり 右ニ在ル二棟ハ仮倉庫ナリ」

木造と牧はどのような人物なのか、両者の関係はどのようなものかについて、図書館の辞書類で調べたが手がかりはつかめなかった。ところが意外なところから、両者の人物と関係を知ることの出来る手がかりが見つかった。今まで何度かインターネットで木造昶と牧為助を検索したが有用な情報は得られなかった。しかし今回、牧為助をインターネットで検索すると、東京中野の芭蕉堂印房のHPに行き着いた。そこには一八八六年に日本で最初に彫りゴム印を発明した牧為助が、一八九四年仙台芭蕉の辻で芭蕉堂印房を始めたこと、牧為助の父の木造正義は名古屋上前津町（現在の名古屋市中区大須付近）に住んで二男一女の子がおり、長男は木造源之丞、次男為助（一八五

四年生まれ）は養子となって牧家を継いだことが記されている。さらに「長男木造源之丞は西南戦争、日清、日露戦争で従軍し、優秀な軍人だったらしく金鵝勲章」を受けたとも記されている。このことから、木造昶は木造源之丞の別名で、兄である木造昶『鹿兒島役従軍日誌』を弟の牧為助が写したと考えられる。写した時期は牧為助が名古屋に住んだ日清戦争以前と推定される。更に確認作業を続ける必要があるが、『鹿兒島役従軍日誌』の由来がわかり、かなり信用できる資料であると推定できるようになった。

上記のように、木造昶『鹿兒島役従軍日誌』は西南戦争従軍兵士が記した日記そのものでなく、後のコピーであるにもかかわらず、あえて紹介する理由は、木造昶が西南戦争で所属した「遊撃歩兵第一大隊」という部隊が、すでに徴兵制軍隊が主流となった官軍の中で例外的な、旧和歌山藩兵を主体とする「壮兵」を臨時徴募した部隊であり、武士出身の壮兵たちの戦闘の様子を伺うことのできる珍しい資料であるからである。

つぎに木造昶『鹿兒島役従軍日誌』を翻刻する上での凡例を記しておく。

本文中の旧字体は原則として新字体に改めた。木造昶日誌は判読が容易である一方で、誤記、誤字、当字が多かったが、原則として訂正せずそのまま残し、明らかな誤りや意味不明な箇所には（ママ）のルビを振り、必要に応じて一部（ ）で修正した箇所がある。日記中の割注は〔 〕で示した。資料の翻刻には、地名と人名の注記が不可欠であるが、今回は紙幅の関係で、原稿段階で用意した注記をすべて省略した。

なお、西南戦争の研究史と資料史については、『専修大学人文論集』第八八号（二〇一一年三月）所収の拙稿「資料紹介・碓井福太郎『鹿兒島征討日記』——西南戦争に従軍した政府軍兵士の日記——」に記した西南戦争の研究史・資料史を参照にしていきたい。

二 木造昶の所属部隊について

(一) 木造昶の所属部隊の変遷

『鹿児島役従軍日誌』は、一八八七年（明治一〇）三月二〇日に、旧名古屋城三の丸の名古屋鎮台兵営で勤務していた木造に大阪に向かうよう命令があった記事から始まる。

当時の日本は六鎮台があり、第三軍管区の名古屋鎮台には、第六聯隊（名古屋）と第七聯隊（金沢）が所属した。西南戦争時の名古屋鎮台司令長官は四条隆譚少将であった。

木造は受命の翌日、三月二一日に名古屋を発ち、徒歩と人力車と船で美濃路から中山道を経由して京都に至り、京都からは鉄道に乗って二四日大阪に到着し、大阪鎮台に出頭した。所属部隊については、三月二六日に「同日午後遊撃歩兵第一大隊第二中隊附拜命、同夜八時本町第五營、則ち砲兵營へ入屯」、三月三〇日に「征討別働隊第三旅団へ編入セラル」と記している。その後の所属部隊の変遷に関する記事を挙げると、熊本城下の川尻（熊本城を包圍していた薩摩軍の本営と病院が置かれていた）を四月一四日に占領した翌日の四月一五日の記事に「同日別働第四旅団ト改称ス」とある。さらに熊本県南部の佐敷（現在の熊本県葦北郡芦北町佐敷）を占領し、人吉攻撃の準備のために球磨川方面（球磨川道）への進出を図っていた五月一四日に「同日別働第二旅団へ合併ノ令アリ」と記されている。

すなわち『征西戦記稿』第三五卷「佐敷水俣口戦記」の、五月上旬山県參軍が八代を視察した結果、別働第二旅団（旅団長山田顕義少将）と別働第四旅団（旅団長代理黒川通軌大佐）は寡兵で広い戦線を担当しているため、五

月一六日を以て別働第四旅団を解散して別働第二旅団に合併、黒川大佐は別働第二旅団参謀長となったという記述がこれである。

以上を整理すると、木造は三月二六日に遊撃歩兵第一大隊所属を命じられ、この遊撃歩兵第一大隊は、別働第三旅団（三月三〇日）↓別働第四旅団（四月一五日）↓別働第二旅団（五月一四日）と所属組織が短期間に変動した。それ以後、木造曹長とその所属する遊撃歩兵第一大隊は別働第二旅団に所属して、熊本・宮崎・鹿兒島を転戦して終戦を迎えたのである。

（二）別働第四旅団（後に別働第二旅団に合併）と遊撃歩兵第一大隊の成立事情

木造が所属した、三月下旬に編制され黒川通軌大佐が指揮した旅団、後に（四月一五日に）別働第四旅団と改称される旅団の編制事情は、『征西戦記稿』によると下記の通りである。

二月中旬、薩摩軍による熊本城包囲攻撃と熊本北方での薩摩軍と政府軍（当初、小倉の第一四聯隊）との戦闘が始まると、政府は次々と正規軍と巡查隊を熊本県北部に送り込んだ。二月一九日、鹿兒島賊徒征討の詔が発せられ、有栖川宮熾仁親王を征討都督に、山県有朋・川村純義両中将を参軍に、東京鎮台司令長官野津鎮雄少将を第一旅団長に、大阪鎮台司令長官三好重臣少将を第二旅団長に任じ、総督本営を大阪に置くことになった。さらに二月二五日に広島鎮台司令長官三浦梧楼少将を第三旅団長に、そして二七日には大山巖少将を別働隊司令官に任じて戦地に派遣した。これらの第一旅団、第二旅団、第三旅団および別働隊は、さらに若干の増援部隊を得て三月中旬に改編され、第一、第二、第三、第四旅団となった（大山少将の別働隊は解団して、所属各部隊は各旅団に編入された）。改編された政府軍は三月二〇日の攻撃で田原坂の難関を突破した。しかし、薩摩軍は植木の南の向坂で反撃して政

府軍に打撃を与え植木まで押し返し、以後、戦線は膠着状態となり、吉次越・木留・植木・山鹿の線で互いに堡壘を築き対陣した。政府軍が熊本城に連絡するにはさらに三週間以上の激戦を必要とした。

熊本城北方で政府軍が薩摩軍を攻めあぐねている状況の中で、黒田清隆と高島鞆之助は勅使柳原前光に随行し、勅使警護隊を率いて鹿児島に至り、島津久光・忠義に勅書を渡すとともに、鹿児島県令大山綱良の官位を剥奪して長崎に連れ帰った。その後、彼等は勅使護衛隊を活用して熊本城の南部に上陸して、南方から熊本城を包囲する薩摩軍を攻撃すべきであるとの考えを提案し、政府の同意を得た。黒田は参軍に、高島鞆之助少将は別働第二旅団長に任じられた。高島は三月一八日長崎を出港し、翌日、熊本県南部の日奈久付近に上陸し、八代を占領した。黒田参軍も歩兵一大隊半と警視隊五〇〇人を率いて、二一日に八代に上陸した。さらに二五日には山田顕義少将が東京、大阪、広島の鎮台兵を率い（当初、別働第三旅団と称す）、陸軍少将に任じられた川路利良大警視が警視隊を率い（当初、別働第四旅団と称す）八代に上陸した。背面軍各旅団の組織替えが三月二八日に行われ、黒田参軍の下に、高島少将が別働第一旅団を、山田少将が別働第二旅団を、川路少将兼大警視が別働第三旅団を指揮する体制ができあがった。これらの旅団は永山弥一郎の指揮する薩摩軍の抵抗を退けて、三一日、激戦の末に松橋（宇城市松橋町松橋）を占領し、さらに北上して宇土・堅志田方面に進んだ。しかし薩摩軍の抵抗は継続し、一方で南からは別府晋介と辺見十郎太が鹿児島で新兵を募集して編制した九番隊・十番隊が八代に接近していた。

薩摩軍の必死の反撃の前に、黒田参軍の背面軍は兵力不足に陥った。四月四日付で黒田は山県に対して、熊本城連絡を実現するために、山県指揮下の四個旅団の中から兵力若干を背面軍に分かつことを要求した。山県はそれを拒絶する一方で、新たに到着する予定の黒川通軌大佐の率いる一個旅団を黒田の指揮下に置くと返答した。この新旅団は今までの旅団にない特徴、つまり徴兵による兵隊ではなく、壮兵すなわち士族兵を徴募した遊撃隊（遊撃第

表1 黒川通軌大佐の率いた新旅団の構成

新設隊名	兵種	聯隊	大隊	中隊		人員	司令官
				第一中隊	第二中隊		
第二聯隊 第二大隊	大阪駐屯兵	二		一	三	七百八十七 隊大	宮城少佐 八彦
遊撃 第一大隊	第四軍管壯兵					七百〇一 隊大	三好少佐 行成
第四聯隊			二			三百九十七 隊半	野邊大尉 平俊
遊撃砲兵 第一中隊	第四軍管壯兵					百二十六	江間大尉 通孚
會計部							軍醫石坂篤保
病院							十五等出仕矢島可信
砲廠							
軍費		六萬圓					
軍夫		六百					
糧食		二十日					
砲四斤山砲		六門					
同 砲藥		五千					
同 小銃		三百					
同 彈藥		百八十					
同 彈藥		百八十四萬五千八百五十					

(注) 『征西戦記稿』 卷二十二・「衝背軍戦記」 七二頁〜七四頁。

全團 二千六百餘
 總員
 第四軍管ノ壯兵ハ明治八年解隊ヲ命セラレ爾後二年間俸一人口ヲ賜ヒ非常徵集ニ應スヘキ令チ受ケタル者
 遊撃砲兵ハ當時舊式ニ依テ編成シ一小隊ト稱ス今新式ニ依テ記ス

一大隊)が含まれていた。
 表1「黒川通軌大佐の率いた新旅団の構成」(『征西戦記稿』 卷二十二・衝背軍戦記 七二〜七四頁)にあるように、この旅団は大阪に駐屯していた細切れの部隊を再編成して新設した第二聯隊第二大隊七八七人(宮城彦八少佐指揮、東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第四中隊、同第二大隊第三中隊、同第三聯隊第一大隊第四中隊、大阪鎮台歩兵第一〇聯隊第一大隊第一中隊を合併)、遊撃歩兵第一大隊七〇一人(壯兵・旧和歌山藩兵)、仙台鎮台歩兵第一大隊の第二中隊三九七人、遊撃砲兵第一中隊二二六人(壯兵)、それに會計部・病院・砲兵廠・軍夫を付属した二六〇〇余人の部隊であった。
 この部隊が前述のように、川尻占領・熊本城連絡の直後の四月一五日に別働第四旅団と改称した。司令官は不在で参謀長の黒川

大佐が司令官代理に就任し、川尻から南下して熊本県南部の佐敷（現在の熊本県葦北郡芦北町佐敷）を占領し、人吉攻撃の準備のために球磨川方面（球磨川道）への進出を図り、これを阻止しようとした薩摩軍と激戦を交えた。そして一ヶ月後の五月一六日に前記のように、別働第四旅団は解隊して、別働第二旅団に合併した。

次に木造が所属した「遊撃歩兵」については説明する必要がある。西南戦争時の陸軍組織については不明なことが多いが、とくに「壮兵」募集については研究が少ない。現状では『征西戦記稿』の記述と唯一のこの問題に関する学術論文である遠藤芳信「日露戦争前における戦時編制と陸軍動員計画思想（3）——西南戦争までの壮兵編成と兵役志願・再役志願制度——」（『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』第五七号第一号、二〇〇六年）を参考にすると、また、壮兵募集の際に山口県とともに重視された和歌山県の事情は、岡本柳之助『風雲回顧録』（武俠世界社、一九二二年、後に中公文庫、一九九〇年）の旧和歌山藩兵から遊撃歩兵大隊を撰抜する記述が参考になる。

『征西戦記稿』付録の「旅団編成表 中」によると、遊撃歩兵は第一大隊から第八大隊まで編成され、各四中隊からなり（第七大隊のみ五中隊編成）、士官一五五人、下士官五四九人、兵卒六一一二人、合計六八一六人であった。この他に、「遊撃別手組（各府県剣客二成ル」とある）や「遊撃砲兵小隊（第一・第二の各小隊）」が編成されているようである。三月中に編成された部隊の説明を遠藤論文から紹介すると次のようである。

二月二三日付の仙台鎮台よりの「二カ年間賞典米ヲ賜リタル元壮兵召集」についての伺に端を發し、兵力不足の中で壮兵募集問題が論議となる中で（岩倉などは旧藩士族の兵員徴募を主張、これに対し木戸孝允は壮兵徴募に強固に反対）、陸軍省は三月二〇日に陸軍省達甲第一〇号を達し、「一八七五年二月の東京鎮台等における一八七一年召集壮兵の解隊・免役者で賞典米一人口下賜者を召集」、これらを「遊撃隊」と称し、当初は第一大隊から第五大

隊、砲兵は二個小隊に編成する方針であった。ところが仙台鎮台管下の応募状況が予想した程ではなかったため、まず二個大隊を編成する方針に替わり、①三月二五日に遊撃歩兵第一大隊（下士官一〇三人、兵四九二人、大阪鎮台管轄下）、②遊撃歩兵第二大隊（下士官八九人、兵七七二人、名古屋鎮台管轄下）、③三月二七日に遊撃砲兵第一小隊が編成され、さらに④三月三一日に遊撃砲兵第三大隊（当初、山口県下から賞典米一人人口下賜者を召集したが、人数不足で四月新規募集の壮兵を編入）の編成が試みられた。

岡本柳之助『風雲回顧録』の冒頭に収録されている「思い出づる人々」にはこの間の事情が描かれている。岡本は和歌山出身である。西南戦争開戦後、兵力不足が議論される中で、京都行在所中陸軍事務取扱として大阪で部隊編成と兵站事務に当たっていた鳥尾小弥太陸軍中将、鳥尾の参謀滋野清彦中佐、大阪鎮台参謀高嶋茂信少佐と大阪鎮台参謀の岡本柳之助少佐が兵力動員を相談した件をつぎの様に述べている。

鳥尾に滋野、高嶋と俺とで種々相談したが、「それじゃ猷兵はどうか」というので、鳥尾と俺の意見が一致した。猷兵というても判るまいが、廃藩置県のととき各藩から出した兵のことで、二箇年間二人扶持を貰っておたが、つい先頃猷兵の制を解いたが未だ二箇年の年限は満ちていない。「此奴を一つ集めようじゃないか」。

相談一決、それはなによりと可決して急に募ることとなった。紀州へは俺が出かけて近県からも大分集め、とにかく俺の手で歩兵一大隊と砲兵一中隊だけは出来た。それに山地（山地元治中佐〔筆者注〕が仙台から率いて来た二中隊と、大阪表にいた二中隊その他を合わせてざっと二千五百ばかりの兵隊が揃った（『風雲回顧録』二五～二六頁）。

岡本の『回顧録』には、鳥尾と岡本達はこの部隊を単なる補充部隊とするのではなく、精鋭な壮兵を以て西郷隆盛のいる川尻本陣を海上から奇襲して、形勢を一気に逆転し熊本城を救うことを考えたという壮大な話となっている。

三 遊撃歩兵第一大隊の戦闘記録概要

前述のように遊撃歩兵第一大隊は三月二五日に編成され、木造昶曹長は翌二六日に遊撃歩兵第一大隊第二中隊付を拝命し、二八日には大隊会計助手を命じられた。遊撃歩兵第一大隊は、三一日に明治天皇が見守るなか大阪城外練兵所で操練を行い、同日汽車で神戸に向けて出発した。『明治天皇紀』は壮兵について「意気殊に凜然たり」と記している。意気高かった（高すぎた？）壮兵連は、神戸駅では巡查と衝突し、遊郭に繰り出し、軍紀を無視したので、「特二横暴ナル者八十名」が捕縛され、大阪に送り返される始末となった

神戸を出国した後、下関・長崎を経由して、四月五日に熊本県宇土市のJR三角線網田駅（網田）附近に上陸した。船中で木造は第三中隊付を命じられた。翌日夜から宇土方面に進み、木原山（雁回山源為朝伝説が残る）ではじめて薩摩軍と激戦を交えた。さらに遊撃歩兵第一大隊は緑川を越えて一四日に川尻（熊本市南部の港町、薩摩軍の本陣が置かれていた）に侵入した。この日、別働第二旅団の山川浩中佐の率いる部隊は熊本城に最初に達し、熊本城と政府軍の連絡が実現し、薩摩軍はこれ以後人吉方面に撤退を開始した。一五日の『日誌』には、遊撃歩兵第一大隊の一中隊半が城内に「見舞」に入ったことや、木造が薩摩軍戦死者墓地のある幻住寺（延寿寺の誤りか）を訪ねたことが記されている。

四月一五日に別働第四旅団と改称した部隊は熊本県南部に向かい、日奈久温泉でしばらく骨休みをした後、四月二九日に熊本県南部の佐敷（木造は差木と記している）を占領した。熊本で敗戦した後で薩摩軍が根拠地とした人

表2 別働第二旅団の構成（五月二四日、別働第四旅団合併後）

別働第二旅団	
旅団長	陸軍少将山田顕義
参謀長	陸軍大佐黒川通軌
第一方面	陸軍中佐中村重遠
七聯二大	田中少佐（正基）
六聯二大	松浦少佐（正唯）
十二聯二大	河野少佐（通好）
第二方面	砲兵
後備二大	陸軍中佐山川浩
三聯二大	河野少佐（通行）
第三方面	砲兵
一聯二大	八木少佐（働作）
四聯二大	陸軍中佐中村尚武
第四方面	砲兵
屯田兵二大	岡崎大尉（生三）
第五方面	野邊大尉（俊平）
二聯二大	砲兵
遊撃二大	陸軍大佐堀基
砲兵	永山少佐（武四郎）
八大隊半	砲兵
砲兵第一大隊・遊撃砲兵第一小隊	陸軍少佐高島信茂
第一大隊第一小隊	宮城少佐（彦八）
	三好少佐（成行）
	砲兵
	外二
	遊撃歩兵第七大隊（二中隊）
	付属隊歩兵二中隊
	撰抜大隊（三中隊）

（注）木造昶『鹿児島役従軍日誌』より

吉に向かうために、佐敷から峠を越えて球磨川に出ようとしたが、ここで薩摩側は強く抵抗し、一進一退の激戦が約一ヶ月つづいた。この間に別働第四旅団は別働第二旅団と合併し、これ以後、終戦まで別働第二旅団として行動することになった（表2 別働第二旅団の構成）。五月三〇日から政府軍の人吉への総攻撃がはじまり、六月一日人吉市街に進入した。

六月末まで木造達は人吉周辺に滞在し、薩摩軍と小競り合いを続けていたが、七月に入ると人吉市南部の鹿児島県境にある白髭岳（標高一四一六メートル）の守備に当たり、さらに七月一〇日以降は宮崎県小林方面に進入した。七月二四日から政府軍による都城攻撃が始まったが、木造達は二八日に綾村、二九日に高岡、三十一日に佐土原と進んだ。この後、休む間もなく佐土原か

ら北上して、高鍋・美々津の攻撃に参加し、その後は進路を内陸部にとり、八月一四日に政府軍の先頭を切って延岡に入った。翌日一五日は政府軍と薩摩軍の最後の大規模な戦闘となった和田越の戦闘である。この時、別働第二旅団は最も西側の長尾山方面の攻撃に当たった。午前三時に行動を開始して、戦闘が終了したのが午後三時であり、木造の属する第三中隊から戦死者・戦傷者が続出した。ここで本来の意味の西南戦争は終了し、党薩諸隊と薩摩軍の多数は政府軍に投降した。しかし八月一七日夜、西郷と少数の薩摩軍は包囲網を脱出して三田井に向かい、さらに九州の尾根を風のように駆け抜けて九月一日鹿兒島に侵入して鹿兒島中部を占領し、城山を本営とした。

木造は延岡に戻り、所属中隊の士官達と舟を浮かべての鮎漁や月を愛でて痛飲するなど、東の間の休息を許された。八月二四日から移動を開始し、西郷達を追って宇納間、神門などの九州山地脊梁部を南下し、九月七日鹿兒島に到着した。木造は城山攻撃の撰抜隊に選ばれず、この後の日記は甚だ簡単である。

その後、一〇月一七日に乗船するまで鹿兒島に滞在し、一九日に神戸上陸、二〇日大阪に凱旋し、即日遊撃歩兵第一大隊は解隊した。「凱旋」という言葉は使われているが、市民の出迎えがあつたわけでもなく、ただ駅から兵営まで行進するのみで、遊撃歩兵第一大隊の場合は、午前到着、午後解隊というあつげなことで、後の日清・日露戦争時の凱旋とは大違いである。日記の最後には、「従軍日数二百〇四日間」「戦時日数百七十三日間」と記されており、その後の木造の行動は書かれていない。

日記を読んで印象的なのは、遊撃歩兵第一大隊が薩摩軍と第一線で激しい戦闘を続けていたこと、それとともに負傷者・戦死者が多く発生していること、また延岡攻撃の例のように遊撃歩兵はまさに政府軍の先陣を切つて戦闘に従事していたことであった。壮兵を募兵した警視局隊と遊撃歩兵は政府軍の重要な戦力であつたという印象が強い。しかし、壮兵は近代的な徴兵軍より扱いにくかつたことも事実で、この項の最初で紹介した神戸での事件（特

二横暴ナル者八十名」を捕縛して送還)があった。日記の一〇月八日につきの様な記事を木造が記録している。

遊撃歩兵第一大隊第三中隊一等卒

大賀道教

右之者、過ル六月廿五日観音坂出張ノ際、上官ノ命ヲ不用、慾ニ隊伍ヲ離レ私ニ止宿ニ及候科ニ依リ、戦役中
戴罪服務申付置候ニ付、凱陣後相当之処分可致ノ処、爾後嚴ニ謹慎ヲ表シ且勤務勉勵ニ付、過日岩崎谷攻撃之
節モ其人員ニ致加入、旁以無罪ニ取計申度段大隊へ伺出候処、伺ノ通指令有之候条、為心得此旨相達候也

月 日 遊撃歩兵第一大隊第三中隊本部

これは大賀道教一等卒が人吉南部の観音坂で規律違反を犯したので、「戦役中戴罪服務」を命じられていたが、
勇敢に戦闘したので罪を免ずるとの決定であるが、罪状の「慾ニ隊伍ヲ離レ私ニ止宿」(当日は雨が降っていたの
で)など、いかにも壮兵らしい行動様式と思われた。

本稿は科学研究補助金・基盤研究(B)「西南戦争に関する記録の実態調査とその分析・活用についての研究」(課題
番号21320126)による成果の一部である。『鹿児島役従軍日誌』の翻刻と入力については、古幡絵里奈氏に協力
していただいた。

〔表紙〕

鹿兒島役従軍日誌 全

〔本文〕

鹿兒島役従軍日誌

木造昶誌

明治十年三月廿日御用有之大阪表へ被差遣ノ命アリ〔午前二時過〕、暁天丸ノ内竹腰旧邸ノ兵營ヲ發ス、同日帰宅準備ヲ為ス（火曜）

三月廿一日 水曜 雨

午前八時自宅出發、午後一時起シ駅ニ着休午食ヲ喫ス、此日大雨沛然道路泥濘、人力車甚タ遅緩、先キ曳キヲ附シ漸ク夕六時過キ大垣駅ニ達シ、車夫ヲ撰拔シ快走ス、同夜八時垂井駅龜丸屋方ニ着泊ス

三月廿二日 木曜 雨

午前七時人力車ヲ走セテ関ヶ原ニ到ル、同日又雨ノ為ニ山路泥滑快走ス可ラス、因テ止ムヲ得ス徒歩ス、柏原ヨリ再ヒ人力車ヲ命シ午前十一時米原駅ニ着、午食後直チニ渡船大津ニ達セント欲スルモ、此日渡船ヲ出サス、止ムヲ得ス畑屋宇兵衛方滞泊ス

三月廿三日 金曜 晴

午前七時大津丸ニ乗船、午後一時大津着船、同処ニ於テ午食ヲ喫シ、直チニ人力車ヲ走セテ西京ニ入ル、午後三時四十五分三條通り高瀬西へ入ル萬屋方着泊、同夜某樓ニ於テ出陣ノ宴ヲ開キ頗ル興ヲ遣ル

三月廿四日 土曜 晴

午前八時発、人車ヲ走セテ七條停車所ニ到ル、同九時十分ノ汽車ニテ大阪ニ向フ、同十時四十分梅田停車所ニ着ス、又人車ヲ命シ八軒屋大阪屋方着、午食後直チニ大阪鎮台へ出頭シ届書ヲ差出シ、帰路道頓堀辺道遙、同夜大阪屋ニ帰泊

三月廿五日 日曜 晴

鎮台へ出頭セルニ御用ナシ、市中散歩ス、同夜天満ノ天神ニ参詣ス

三月廿六日 月曜

同日午後遊撃歩兵第一大隊第二中隊附拜命、同夜八時本町第五営則チ砲兵營へ入屯

三月廿七日 火曜

記事ナシ

三月廿八日 水曜

大隊會計助手申付ラレ会計事務ヲ執行ス

三月廿九日 木曜

記事ナシ

三月三十日 金曜

三月三十一日 土曜

同日午前

天皇陛下西京ヨリ臨幸謁兵アラセラル、本隊ハ午後五時四十分ト同六時十五分ノ汽車ニ分乗、大阪ヲ発シ神戸ニ向フ、昶ハ屯営物品等整理ノ為メ阪井軍吏補〔重勝〕ト共ニ残留、同夜二時屯営出發、大阪屋方一泊

此日神戸ニ於テ遊撃歩兵第一大隊ノ兵軍規ヲ犯スモノアリ、特ニ横暴ナル者八十名ヲ緝捕シ大阪ニ送り処分セラル

四月一日 日曜 晴

午前七時ノ汽車ニテ神戸港ニ到ル、同所栄町二丁目三井組別荘ニ着休、同日午後楠公社ニ参拝ス、同夜十一時亥海

丸ニ乗艦、同夜二時抜錨

四月二日 月曜

舟行至テ易シ、記事ナシ

四月三日 火曜

艦中無異、午前八時十分艦下ノ関ニ着ス、参謀部書記壺名上陸、直チニ發艦、午後十一時長崎港着艦、同夜三時過同港油屋町大浦方本営宿泊

四月四日 水曜

為松中慰勞酒饌料ヲ賜フ、同日午後俄ニ出發ノ命アリ、午後八時乘艦

四月五日 木曜

午前五時抜錨、午後一時過肥後国宇土郡網田沖ニ着艦、同所ハ遠浅ナルヲ以テ小舟ニテ同四時ヨリ上陸ヲ挙行ス、

同七時宇土郡網田戸口浦村へ着、江藤利三郎方宿泊
船中ニテ第三中隊ニ附屬ス

土人ノ説ニ曰、去ル三十一日賊徒九十六名舟津村ニアリ、軍艦ヨリ大砲ヲ注射ス、賊狼狽停止スル能ハス、小舟ニ
乗シ遁走ス、百貫石辺ニ渡リシ由

同夜陸軍中尉横濱慶昌、第三中隊長心得拜命着隊

四月六日 金曜

戸口浦村滞在、同夜八時出發、夜行軍山隘嶮路、況ヤ暗夜咫尺ヲ弁セス、困難云フ可ラス

四月七日 土曜

午前五時宇土町着、宇土学校ニ於テ休憩、午前十時發二手ニ分レ進撃、第三中隊ハ戸尻村、第四中隊ハ馬ノ背口、
同十二時開戦、左半隊ハ平原山上、右半中隊ハ平原山下田畝ニ散布銃戦、賊兵二百余名木原山ノ中間ニ在テ対戦ス、
午後二時過右半隊ヨリ一分隊ヲ木原村ヨリ賊背後ノ山上ニ迂回セシメ、賊兵ヲ眼下ニ注射ス、賊狼狽傷者器具ヲ擲
テ走ル、追撃木原村ニ入り搜索、傷者壹名ヲ捕獲ス、猶追進半里許午後四時六田村ニ停止、同村堤上ニ於テ午食ヲ
喫ス、午後五時宇土帰陣

鹵獲品 銃二 鎗一 刀一 手旗一

賊遺骸 十名 内司令ラシキ者一

土人説ニ曰ク、六日夜賊兵四百余木原村ニ進入セリト、同村中所々ニ歩哨舎ヲ実檢セリ、木原山ハ一名朝日山又雁
回山下称ス、鎮西八郎為朝ノ古城址ニシテ、鴻雁為朝ノ射術ニ恐怖シ、此山ヲ迂回セシト云フ故ニ名ク

軽傷 小隊長附屬 三輪忠行

同 兵卒 大岩武藏

中隊長附属ハ軍曹相当、小隊長附属ハ伍長相当ナリ

四月八日 日曜

宇土本町四丁目江嶋弥三郎方滞在

此日奥少佐壺大隊ヲ引率シ熊本城ヲ出テ宇土本営ニ達ス

同夜酒ヲ給フ

四月九日 月曜

少尉試補榑崎小次郎第三中隊附キトナル、宇土舎営

四月十日 火曜

宇土舎営、記事ナシ

四月十一日 水曜

午前十時整列、下新開村へ出張、光輪寺ニ舎営、緑川堤上^{ミヅリ}大哨兵ニ服務ス

重傷〔笹原村哨兵線ニ於テ〕 兵卒 鳥井方辰

翌十二日宇土病院ニ於テ死亡

四月十二日 木曜

緑川大哨兵、同日笹原村堤上ニ於テ遊撃砲兵四斤山砲四門ヲ以テ午後一時ヨリ発射、歩兵進撃ノ応援ヲ為ス、歩兵ハ三手二分テ進撃、然ルニ海岸佳吉ノ一手進ム能ス半途ニシ引揚ク〔此手ハ敵ノ兵力ヲサクノ一策ナリシ〕、太郎兵衛渡ノ一手ハ中島ニ至テ停止ス、午後四時光輪寺へ帰陣、同日酒ヲ賜フ

四月十三日 金曜

夜十二時砲隊護衛トシテ笹原村新田緑川堤上へ出張、砲隊ハ同夜十時過ヨリ頻ニ堤上ヨリ前岸ナル二町村学寮新田ノ人家ニ向テ発射セリ、同人家ニ点火シ明昼ノ如シ、同時ニ遊撃隊選抜隊四十名上陸、数ヶ所ニ放火シ大進撃、賊死傷枚拳ス可ラス、十四日弘暁新川ノ戦ヒ、西ノ村ノ戦ハ最モ劇烈、我兵又死傷アリ、然レトモ賊ノ本営ヲ略取シ糧米其他捕獲品多数ニシテ、容易川尻ニ入ル

四月十四日 土曜

午前九時砲隊並ニ第三中隊ハ六弥太渡ヨリ緑川ヲ渡河ス、八丁へ上陸、直チニ川尻ニ進入ス、夕七時同所若宮大哨兵トシテ出張

四月十五日 日曜

午前八時第一中隊ト交代、川尻舎營

同日別働第四旅団ト改称ス、同日熊本城ヘ酒ヲ送ラル、遊撃隊一中隊半見舞トシテ同城ニ入ル

同日午後幻住寺(延寿寺カ)墓地ヲ実視ス、賊徒ノ墳墓九百六十本余ナリ、近傍ノ地ニ於テ戦死セルモノ、若クハ

川尻病院ニテ死没セルモノナリ

四月十六日 月曜

午前十時発、攻襲偵察トシテ二中隊高橋町ヨリ上松尾、平山両村、百貫石、小島ヲ経テ、午後十時川尻へ帰着、此日金峯山ヲ登ル、殆困却セリ

四月十七日 火曜 雨

午前一時川尻発、松橋町小川町ヲ経テ、午後六時宮ノ原着泊

20
四月十八日 水曜

午前八時宮ノ原発、午前十一時八代郡八代中島町着休、同日午後三時八代发、芦北郡日奈久着、午後九時ナリ、直ニ哨兵ヲ配置ス、昶ハ公用ノ為メ後ヨリ出发、路ヲ誤リ球磨川右岸ヲ直進ス、横谷ニ出ツ、再ヒ八代ニ帰、道路ヲ探知シ、夜十二時日奈久ニ着ス

四月十九日 木曜

日奈久滞在、記事ナシ、半隊大哨兵、半隊舎営

四月二十日 金曜

前日ニ同シ

四月廿一日 土曜 晴

日奈久ハ温泉場ニシテ、伊勢屋ノ大厦高楼ニ起臥シ〔一中隊ヲ寛潤ニ收容シ猶余リアリ〕、更ニ西天ヲ望メハ、春潮不浪天草ノ諸島目前ニ螺列シ、風光明媚実ニ勝景ナリ、随時温泉ニ浴ス、積日ノ鬱劳忽チ消散ス、頗ル慰劳ノ佳境タリ

四月廿二日 日曜

前日ニ同シ、此日黒田中将参軍ヲ罷テ還ラル

四月廿三日 月曜

前同断

四月廿四日 火曜

前同断、酒ヲ賜フ、廿二日以来隔日ヲ以テ例トス

四月廿五日 水曜 雨

前同断、黒田参軍ヨリ麦酒及肴ヲ賜フ

四月廿六日 木曜 半晴半雨

四月廿七日 金曜

同日風雨甚シ、楼上ハ悉皆戸ヲ閉鎖スルニ至ル、夜ニ至リテ雲霽レ月光ヲ看ル

四月廿八日 土曜 晴

記事ナシ、無事滞在

四月廿九日 日曜 晴

差木（佐敷カ）進撃、陸海ヨリ進ム、右半隊ハ横濱中隊長及ヒ長瀬曹長之二属シ陸ヨリ進ム、斥候賊兵狼藉ノ状ヲ察シ数発劇射ス、終ニ狼狽シテ遁走ス、左半隊ハ檜崎少尉試補、木造曹長之二属シ、軍艦鳳翔号ニ乗シ、午後六時二十分拔錨、午前三十五分差木沖着艦、ハツテーラヲ以テ海軍兵先頭上陸、軍艦ヨリ空砲ヲ発射シ声援ヲ為スハカリ、石村ヨリ七合許佐敷ニ着ス、午前一時ナリ、直ニ大哨兵ヲ配置ス

四月三十日 月曜 晴〔夕六時頃ヨリ雨〕

佐敷滞在、記事ナシ

五月一日 火曜 雨午後霽

記事ナシ、佐敷舎營

五月二日 水曜 晴

前日同シ

22 五月三日 木曜 晴〔夕刻ヨリ雨〕

午前三時整列、鋒野峠（鋒野峠の誤カ）賊壘ヲ攻撃、賊戦シテ潰走ス、我兵勢ニ乗シテ鋒野峠ヲ略シ、賊ノ哨舎ヲ火シ、保塁ヲ改築シテ守備ス、朝食後松生村^バヲ搜索シ、佐敷ニ帰陣ス、午前九時半ナリ

鋒野嶺口吟

向処胸牆無抗兵。峯頭只認旭光明。休言鋒野山嶺峻。一放闕声火賊營。

五月四日 金曜 雨

差木舎営、記事ナシ

同所里程標ニ依レハ薩州米ノ津へ八里、人吉へモ八里ナリ、熊本ヲ距ル二十里八丁六間ナリ

五月五日 土曜 雨

記事ナシ、休憩

五月六日 日曜 曇

午前五時三十分整列、斥候トシテ上白木村へ出張、同六時半到着、賊兵二十余名山上ニ顕ル、砲隊霰弾ヲ注射ス、賊堡壘ニ潜ム、一分隊ハ正面山上ニ昇リ、三分隊ハ右側山上ニ昇リ、又二分隊ハ左側山上ニ昇ントシ山腹ニ至ル、賊兵二十許名山上森林中ヨリ劇射ス、我兵苦戦憤進、終ニ山上ニ達シ賊ノ左側ヲ劇射ス、右側ノ三分隊モ亦憤戦ス、賊兵益増加我利ナラサルヲ察シ、午後二時終ニ退却ス、午後三時佐敷帰陣

右手軽傷 中隊長附属 伊藤富士太郎

右足軽傷 兵卒 森伊蔵

五月七日 月曜 晴

佐敷舎堂

檜崎少尉試補少尉拝任、長瀬曹長少尉試補拝命

五月八日 火曜 晴

同夜十時整列、同十時三十分鋒野峠ニ着シ、同所ニ於テ夜食ヲ喫ス、且酒ヲ賜フ、高島參謀少佐進撃ノ部署ヲ定ム、第二中隊ハ先鋒賊ノ右側ノ山ニ向テ進ミ、第四中隊ハ其次キノ左ニ進ム、我カ第三中隊ハ二分隊ヲ檜崎少尉引率シ諏訪山ニ昇リ、二分隊ヲ木造曹長引率シテ上白木村砲隊護衛及ヒ大尼田口ノ警備諏訪山ノ応援ニ任ス、又四分隊ヲ横濱中隊長、長瀬少尉試補之ヲ引率シテ正面上ニ昇リ頻ニ発射ス、又横濱中隊長ハ二分隊ヲ引率シテ賊ノ左側堡壘ニ突入ス、賊狼狽潰走ス、遂ニ白木山上ヲ略取シ暫時銃砲戦ヲ為ス、然レトモ兵員寡少ニシテ嚴守ス可ラサルヲ以テ退却ス、翌九日午後三時鋒野峠ニ引揚ケ休憩、午後四時差木帰陣

左手銃傷 中隊長 町田政治

右膝銃傷 上等兵 門安五郎

左肩刀傷 兵卒 取出善次郎

頭部打撲傷 兵卒 三輪保敬

左足銃傷 兵卒 高橋栄吉

五月九日 水曜 晴

弘暎ヨリ白木山戦鬪

五月十日 木曜 晴

午後長瀬少尉試補六分隊ヲ引率シ兼丸村二分遣ス

記事ナシ

五月十二日 土曜 晴

午前五時賊兵曉霧ノ深ニ乗シ田川口ヨリ兼丸村ノ哨兵線ニ襲来、終ニ兼丸村ニ入テ火ヲ放ツニ至ル、我兵苦戦ス、佐敷神社前ニ備ヘタル四斤山砲一門霰彈ヲ劇射シ大ニ功ヲ奏、遊撃手砲兵卒某最モ勇戦劇闘ス、漸次第一、二中隊ノ来援ヲ得テ河岸並ニ右側又ハ兼丸背後ノ山ニ登リ劇戦、午前九時頃賊敗走、勢ニ乗シ追撃山中ヲ搜索シ賊死体十七名、生擒四名ヲ得タリ、午前十時半差木帰陣

左臑骨銃傷 軍曹 天野直

左指銃傷 上等兵 角田伝八郎

左肩胛銃傷戦死 一等兵 後藤松太郎

五月十三日 日曜 雨

賊兵松生峠ニ襲来ノ報アリ、午前三時出発松生峠ニ向フ、午前十時差木帰陣、午後八時発鋒野峠へ出張、同所大哨兵

五月十四日 月曜 雨

鋒野峠大哨兵、午後三時差木帰陣

同日別働第二旅団へ合併ノ令アリ

五月十五日 火曜 雨

午前十一時佐敷発、午後二時大尼田村着、即時球磨越大哨兵

- 五月十六日 水曜 晴
 球磨越大哨兵
- 五月十七日 水曜^マ 晴
 午前十一時三十分大哨兵第一中隊ト交代、大尼田舎営
- 五月十八日 金曜 晴
 大尼田村舎営、記事ナシ
- 五月十九日 土曜 晴
 午前十一時第一中隊ト交代、球磨越大哨兵服務
- 五月二十日 日曜 晴
 隈越^マ大哨兵
- 五月廿一日 月曜 晴
 午前十二時第一中隊ト交代、大尼田村婦休舎営
- 五月廿二日 火曜 晴
 午前六時整列大河内村出張〔道程約二里〕、午前十時吉雄村到着、市原越及ヒ簸瀬口大哨兵
- 五月廿三日 水曜 晴
 午前十時市原越ヨリ引揚ケ吉雄村舎営、同夜簸瀬口同断
- 五月廿四日 木曜 晴
 吉雄村舎営

26
五月廿五日 金曜 晴

午前六時出發、同十時長澤村着休憩、牛尾峠ヲ經テ十二時告坂峠着、堡壘ヲ築キ大哨兵ヲ配置ス

五月廿六日 土曜

午後一時第一中隊ト交代、角割村舎宮、午後六時出發、右半隊ハ告坂山上援隊、左半隊ハ鎌瀬村警備ニ服務ス

五月廿七日 日曜 晴

午前十時整列二分隊斥候トシテ一勝地村へ出張、賊兵同地山上ヨリ劇射スルヲ以テ急ニ退却ス、午後六時過帰陣

五月廿八日 月曜 晴

十二時發第一中隊ト交代、告坂峠大哨兵ニ服務ス

五月廿九日 火曜 晴

午前三時告坂發、池ノ下、篠ノ^{ソノキ}兩村山上ニ出張、大哨兵ヲ配置ス、堡壘中築造中賊兵ヨリ大小砲ヲ注射セリ

五月三十日 水曜 晴

一勝地山戦闘、此日人吉城陥落（人吉陥落は六月一日―校訂者注）、午前十一時引揚

五月三十一日 木曜 晴

横濱中隊長五分隊ヲ引率シ渡リ村へ出張、大哨兵ヲ配置ス、三分隊ハ一勝地村ニ在テ舎宮

別紙之通 被仰出候條、厚ク御趣意ヲ体認シ部下へ諭達可致事

五月廿六日 有栖川征討総督

山田陸軍少將殿

川路陸軍少將殿

諸軍隊奮励勇戦、曩ニ熊本城ニ連絡シ大ニ賊勢ヲ挫キ候段 叡感不尠、依テ積日ノ軍勞ヲ被慰、侍従長東久世通
縉ヲ被差遣、別紙目録之通下賜候事

明治十年五月十八日

目録

- 一 佐官並相当官 拾円ツ、
 - 一 大尉並相当官 七円五拾銭ツ、
 - 一 中尉並相当官 文官七等以上 五円ツ、
 - 一 下士 判任 警部 弍円五拾銭ツ、
 - 一 兵卒 等外 巡查 壹円ツ、
- 患者之部
- 一 佐官 拾五円
 - 一 尉官 拾円
 - 一 下士 参円
 - 一 兵卒 弍円

六月一日 金曜 晴

午前三時発、一勝地村ノ三分隊ハ江ノ口村へ、渡り村ノ五分隊ハ中神村^{カミ}へ出張

六月二日 土曜 晴

午前渡り村ニ於テ中隊併合、午後三時一勝地村へ全中隊引揚ケ舎営ス

六月三日 日曜 晴

午前十時發、三ヶ浦村ノ内子前床村轉移之処、俄ニ模様替大尼田村舎営、昶ハ參謀官隨從高岡山哨兵線巡視

六月四日 月曜 晴

午後六時出張、紅取山大哨兵

六月五日 火曜〔午前二時ヨリ雨、同八時半ヨリ晴〕

同日大、中隊本部ヲ大柿村ニ移転ス

六月六日 水曜 小雨午後晴

大哨兵ヲ二本箒ニ移ス

六月七日 木曜 晴

前同断二分隊ヲ斥候トシテドンデン〔論伝ナリ〕山出張

六月八日 金曜 晴後雨

前二同シ

六月九日 土曜 晴

前同断、昶ハ小柿村舎営ニ休憩

六月十日 日曜 晴

二本箒大哨兵、記事ナシ

六月十一日 月曜 雨

前同断

六月十二日 火曜 晴

午前十一時発、田野村前面山上マテ斥候、田野賊塁ヲ偵察ス、午後九時大柿村へ帰着舎営

六月十三日 水曜 晴夜雨

前同断、午後五時発鹿目村出張、同夜シリカグメ峠露営

六月十四日 木曜 晴

払曉田野村進撃、前夜賊遁走ス、直チニ田野村進入休憩、即時大塚村へ転進、又吉田越ニ出張、観音坂ニ大哨兵ヲ

配置ス

六月十五日 金曜 晴

観音坂大哨兵、同日炊事場ヲ大河間村ニ移ス

六月十六日 土曜 晴

前同断

六月十七日 日曜 晴

前二同シ

六月十八日 月曜 午後雨

前同断

六月十九日 火曜 曇

前同断、同日大口陥ル

30 六月二十日 水曜 雨

前二同シ

六月廿一日 木曜 晴

前同断

六月廿二日 金曜 晴

吉田村へ進入、河ヲ隔テ互ニ堡壘ヨリ銃炮ヲ放射シ対戦ス

六月廿三日 土曜 晴

午後六時觀音阪へ引揚ケ、同所大哨兵

六月廿四日 日曜 晴

午後八時間村字箕野へ引揚ケ、稗原勇財方舎營

六月廿五日 月曜 晴

午前八時觀音阪出張、夕六時過ヨリ雨

六月廿六日 火曜 雨

大哨兵前日ニ同シ

六月廿七日 水曜 雨

觀音阪大哨兵

六月廿八日 木曜 雨午後晴

第四中隊ト大哨兵交代、間村稗原方舎營

六月廿九日 金曜 晴

間村舎宮、人吉城市ヲ巡視ス

六月三十日 土曜 晴

間村舎宮

七月一日 日曜 晴

人吉市街ヲ巡視ス、此日賊壺屋村ニ襲来、我兵利ナラス急ニ出張ノ命アリ、午後八時間村ヲ発シ赴援ス、夜行軍

七月二日 月曜 晴

午前六時平野村着、同九時又同所ヲ発シ宮ノ原村到着、直チ二月木越進撃、半途ニシテ退却、同村舎宮

七月三日 火曜 晴

午前三時発、第一方面中村中佐（重遠）ノ指麾下ニ属シ皆越攻撃、地藏阪及耳取山ノ賊ヲ掃攘シ、糧米八十余俵及味噌若干樽、大小鍋十数個、其他炊事具等多数ヲ鹵獲ス、同日耳取山大哨兵

七月四日 水曜 晴

耳取山及ヒ小白髮嶽大哨兵

此地ハ有名ナル白尾嶽〔大白髮、小白髮〕ノ山麓ニシテ人烟稀薄ノ深山ナリ、冷泉アリ其味甘露ノ如シ

つ、乃音は絶へて麓の清水かな

十四大区九小区皆越村〔右久浦木、左スウキ〕ノ木標アリ、又老杉ノ枯槁セルアリ、一本杉ト称ス、肥後日向ノ国境ナリ

七月五日 木曜 晴

七月六日 金曜 晴雨相半〔午前雨、午後晴、夕五時ヨリ又雨〕

前同断、小白髮嶽ノ堡壘ハ之ヲ築クニ該リ、多クハ崑石ニシテ土ヲ得ルニ究困ス、故ニ鹵獲ノ米俵ヲ併列シテ之ニ土ヲ覆ヒ以テ堡壘トス、頃日地險悪、運輸ニ苦ム、為メニ糧食充分ナラス、夜半ニ及シテ空腹ヲ訴ル甚シ、茲ニ於テ某ノ發議ヲ以テ堡壘ノ一隅ヲ破壊シ、鹵獲ノ味噌ヲ利用シ雜水（雜炊カ）ヲ煮テ以テ空腹ヲ慰ス、一奇談ト云フ可シ

七月七日 土曜 雨

大哨兵前日二同シ

七月八日 日曜 晴

前同断

七月九日 月曜 晴午後十時ヨリ雨

前日二同シ

発乙第千百二号

去ル明治四年廢藩、四鎮台被置候節召集候壯兵、同八年二月解隊相成、其砌為賞典同年六月一日ヨリ向二ヶ年、一人人口下賜候旨陸軍省ヨリ達相成居候処、先般臨時召集遊撃隊編成、現今出征中右章典米下賜之日限己ニ相満候得共、本年五月廿九日發乙第九百十八号ヲ以テ相達置候趣モ有之候ニ付、賊徒平定右解隊迄之間従前之通一人人口下賜候、此旨相達候事

明治十年七月九日 征討総督本營

別働第二旅団

七月十日 火曜 雨

夜十二時発、国見山正面賊塁攻撃、闇夜山路険悪困苦云フ可ラス

七月十一日 水曜 晴

午前三時三十分ヨリ開戦ノ筈ナリシニ、賊哨舎及ヒ須木村ニ放火シ遁走セリ、午前八時出發尾撃シテ須木村中駒村ヲ経テ須本(須木カ)村入口迄出張、午後九時国見山「バラック」ニ帰着ス、半途ヨリ大雨沛然トシテ至リ困窮ヲ尽セリ

七月十二日 木曜 晴午後小雨

国見山大哨兵

七月十三日 金曜 晴

国見山大哨兵

七月十四日 土曜 晴午後七時ヨリ雨

前日ニ同シ

七月十五日 日曜 雨

午前八時大哨兵ヲ引揚ケ中古馬村ニ舎営、同日二分隊ヲアラダイ山哨兵トシテ出ス

七月十六日 月曜 雨

麓越へ半隊ヲ出シ哨兵ヲ布置ス

七月十七日 火曜 雨

麓越大哨兵、長瀬少尉試補二分隊ヲ引率シ野尻村迄斥候トシテ出張、然ルニ賊巢^{ス、ハラ}原村ニ哨兵線ヲ布置シ、彼ヨリ劇射スルヲ以テ急ニ引揚ケタリ

七月十八日 水曜 晴

麓越大哨兵

七月十九日 木曜 晴

早天野尻攻撃、二分隊ヲ木造昶引卒シテ横谷越へ、半隊ヲ横濱中隊長、長瀬少尉試補指揮シテ巢師^{ス、}原越へ、二分隊ヲ麓越旧線ニ残置シ以テ援隊トナシ、第四中隊ヲ先鋒トシテ進ム、然ルニ小林口進撃セサルヲ以テ、戦闘半ニシテ旧線ニ引揚ケタリ、午前九時ナリ

七月二十日 金曜 晴

午後三時半隊ヲ木造昶引率シテ大野村へ出張

七月廿一日 土曜 晴

麓越半隊ハ山城^{ヤマト}山攻撃目的ヲ達ス、内二分隊ヲ内山越ニ出シ大哨兵ヲ配置ス、大野村出張ノ半隊ハ内二分隊ヲ龍野山ノ麓ニ配置シ、二分隊ヲ駒帰リ峠ニ置ク、此戦ハ廿日廿一日ノ両日ニ涉リ、賊勢甚強シ依テ苦戦ス、二度目ノ田原坂ト称ス

七月廿二日 日曜 晴

麓越半隊ハ野尻攻撃、賊潰走ス、内山村舎營、駒帰山半隊ハ同所大哨兵

七月廿三日 月曜 晴午後雷雨

前日ニ同シ

七月廿四日 火曜 晴

午前八時駒帰山大哨兵、第二聯隊ト交代、小野山舎営

七月廿五日 水曜 雨

午前七時發七ツ山出張、同所大哨兵

七月廿六日 木曜 晴

前日ニ同シ

七月廿七日 金曜 晴

前日ニ同シ記事ナシ

七月廿八日 土曜 晴

午前二時發、同四時半一ノ瀬賊壘攻撃、戦鬪一時半許ニシテ賊潰走、追撃上畑村ニ進入休憩、直チニ綾村ノ内中道

ニ進入舎営

七月廿九日 日曜 晴

午前三時發高岡攻撃、小原村ヲ経テ向阪ニ進ム、更ニ路ヲ転シテ森永町ニ入ントス、賊河岸ニ依テ防戦暫時ニシテ走ル、「スナイドル」銃包五百発入五個ヲ鹵獲ス、同所休憩午後二時發、第一中隊応援トシテ出張、族遁走セルヲ

以テ之ヲ追テ本莊十日町ニ進入ス、半隊ヲ以テ哨兵ヲ布置シ、半隊ハ舎営ス、島原玄龍方泊

七月三十日 月曜 晴

半隊哨兵、半隊舎営

七月三十一日 火曜 晴

午前八時發六日町へ出張、同十時木之脇ニ進入、途上殘賊ヲ追撃シ廟堂寺越ヲ經テ十二時廟堂寺村ニ着休憩、午後三時本隊及ヒ教導團撰拔隊、近衛兵一中隊ト共ニ佐土原ニ突入ス、賊狼狽潰走ス、追撃喇叭ヲ吹奏シ大ニ鬨声ヲ發シテ佐土原ニ突進ス、午後六時ナリ、市街及土族邸ニ放火シ、高鍋口一ノ瀬川河岸ニ大哨兵ヲ布置シ露營ス
此日賊ノ負傷者道路ニ遺棄シ去ル、其慘状云フ可ラス

八月一日 水曜 晴

午前十一時第一中隊及ヒ大阪鎮台兵ト哨兵線交代、佐土原土族邸舎營、此日前岸賊兵頗ニ増加ノ模様アリ、放火劇甚ナリ、夜ニ至テ大ニ襲来ス、暫時ニシテ之ヲ撃掃セリ

八月二日 木曜 晴

午前三時發高鍋攻撃、一ノ瀬川対戦、大小砲銃ヲ劇射ス、賊又之ニ抵抗シ其勢輕侮ス可ラス、屯田兵左翼ヨリ渡河シ、次テ諸隊又渡河シ潰賊ヲ追テ高鍋ニ進入ス、賊ノ參軍坂田諸潔ノ軍令状其他書類等數多及ヒ天幕二張ノ鹵獲品アリ、市街ハ散乱慘状ノ景況云フ可ラス、少時休憩ノ後比企野村へ進入舎營

八月三日 金曜 晴

午前四時發高城ニ進入、半隊ヲ延岡街道ノ大哨兵ニ宛テ、半隊ヲ木造昶引率シテ參謀官隨從、間道ノ殘賊ヲ搜索ス、同日午後兩半隊共引揚ヶ舎營ス、同所小学校ナリ

八月四日 土曜 雨午後晴

午前五時發尾鈴山へ出張ノ命アリ、依テト、口村、木羽田村ヲ經テ平山村ニ進入、半隊大哨兵、半隊舎營

八月五日 日曜 晴

平山村舎營休憩

八月六日 月曜 晴

坪屋攻撃、夜十二時発、サヤ原村ヲ経テ丸山村ヲ過キ、同所山間ニ於テ露營ス、二分隊ヲ哨兵トシテ山上ニ出ス

八月七日 火曜 大雨

坪屋村ノ内赤井ガソ村進入舎営

八月八日 水曜 大雨車軸ヲ流スカ如ク雷鳴又頻ナリ

午前三時発、山蔭^ゲへ進軍ノ処、河水満漲渡河ス可ラサルヲ以テ、川上ニ壺里余ヲ迂回シ、山蔭^ゲ村ノ内羽阪角村ニ於テ停止、舎営ス

八月九日 木曜 雨

午前六時発、山蔭^ゲ川ヲ渡船シ山蔭^ゲ本村間野休憩、塩見村ノ内永田村へ進入舎営、此日諸川皆満漲、道路為ニ通セス

八月十日 金曜 曇

永田村舎営

八月十一日 土曜 晴

午後五時永田町発、引返シテ山蔭村ニ至リ休憩、後夜行軍

八月十二日 日曜 晴

田代村ヲ経テ粕野村ニ進入、舎営

八月十三日 月曜 晴

午前八時発、宇納間^{ウナマ}村ノ内小原^{コハラ}舎営、午後五時発、小黒木村へ進入、同所地藏堂前大松樹下露營

八月十四日 火曜 晴

午前八時発、伊原村へ進入休憩、午後一時同所ヲ発シ延岡へ進入、午後六時同所士族邸へ舎營

八月十五日 水曜 晴

午前三時発、熊田村賊巢攻撃先鋒トシテ小梓越ニ進路ヲ取り、稻荷崎村ニ進入シ後隊ヲ待ツ、然ルニ賊急ニ大挙シテ地藏阪辺ノ山上ニ於テ合図ノ号砲ヲ発シ、頻リニ喇叭ヲ吹奏シ大ニ勢ヲ張り、一斉突進セントス、茲ニ於テ中隊中二分隊ヲ大砲ノ護衛トナシ、六分隊ヲ二分シ三分隊ヲ長瀬少尉試補指揮シテ右方ニ該リ、三分隊ヲ木造昶指揮シテ左方ニ當リ、必死ヲ以テ劇戰憤闘ス、彼レ抜刀隊ヲ以テ頻リニ突入セント計ルモノ數時、況ヤ左方ノ三分隊ハ芋畑ニ散布シ地物頼ル可キナク、刻苦終ニ賊數名ヲ斃シ漸ク之ヲ山上ニ追ヒアゲタリ、殆ド午前十時ナリ

股間銃傷 小隊長付屬 大野良吉

戦死 兵卒 松本全四郎

左肩銃傷 彈藥運搬人夫 軍夫一名

右稻荷崎ニ於テ

諸隊統々援來増加シ大ニ勢ヲ得、永尾山ノ中腹ニ迫ル、賊永尾山ノ絶頂一本松（一松樹アリ之ヲ一本松ト称ス）ノ要地ヲ占メ堅固ノ堡壘ヲ築キ、我ヲ眼下ニ注射ス、官兵負傷者多數、士官ノ如キハ中村中佐始メ數名ニ至ル、如何セン彼レ要所ニ在テ、我ハ仰テ之ニ対ス、山腹ニ集同セル兵數殆トハ中隊許ナルモ、尠シク運動スレハ忽チ斃サル、単ニ伏シテ銃火ヲ射出スルノミ、漸クシテ賊潰去（潰去カ）セントスルノ勢アルヲ認め、急ニ突撃進出シテ遂ニ山頂ヲ略守シ、山間ヲ潰走スル賊兵ヲ注射スル、其快云フ可ラス、昶老分隊ヲ卒テ尾道ヲ追撃スルコト數丁ニシテ第八中隊ノ後來スルニ逢ヒ、其地ヲ同隊ニ譲リ一本松ニ凱旋ス、午後三時ナリ、茲日昶ハ午前三時出發朝食ヲ喫スルノミ、始メテ茲ニ至リテ空腹ヲ覺へ実ニ堪へ難シ、途中他隊ノ人夫糧食ヲ運搬シ歸ルニ遇ヒ残余ノ握飯ヲ乞テ此ヲ

喫ス、其甘味百味ノ美食ダモ及ハス、可笑々々、同夜援隊トシテ同所ニ於テ露營

面部銃傷 上等卒 角田傳八郎

股 兵卒 吉川四郎

肘 兵卒 安部剛吉

肩 加藤惣四郎

戦死 箕浦正義

右永尾山ニ於テ

八月十六日 木曜 晴

長尾山大哨兵

八月十七日 金曜 晴

永尾山援隊、同夜賊兵^{エノタケ}之嶽ヲ破テ遁走ス

八月十八日 土曜 晴

永尾山援隊、午後五時延岡へ引揚ケ舍營

八月十九日 日曜 晴

午前三時発、右半隊長尾山大哨兵出張、午後五時発左半隊同断

八月二十日 月曜 晴

昧早延岡へ引揚ケ舍營、同日川ニ於テ漁獵ス

八月廿一日 火曜 晴

40 午前六時発、第廿一中隊ト交代、長尾山大哨兵

八月廿二日 水曜 晴

午前五時発、偵察トシテ檜ノ谷へ出張、タケシ村舎営

八月廿三日 木曜 晴

午前三時発、延岡街東端中野瀬村へ引揚ケ舎営、同日中野瀬川ニ於テ年魚ヲ漁シ、同夜ハ同河ニ舟ヲ浮ヘテ明月ヲ賞ス、横濱、長瀬両氏ト快飲ス、是レ日奈久楼上以來始テノ遊興ナリ

八月廿四日 金曜 晴

午前四時発、倉田村ノ内渡守ニ舎営、同夜十時新町へ進入、速ニ七ツ山進撃ノ命アリ、即時出發夜行軍

八月廿五日 土曜 雨午前風雨劇甚

午前六時船ノ尾着、休憩即時出發、家代村へ進入舎営、船ノ尾家代間六里ノ行程人家ナシ、唯中間ニ於テ御立中小屋ト称スルニ軒ノ家アルノミ、道路險悪殊ニ暴風雨ニシテ困難云フ可ラス

八月廿六日 日曜 暴風雨

暴風雨河水満漲道路不通、家代村禪寺舎営

偶然一絶ヲ賦ス、壁間十六羅漢ノ幅アリ、句之二及ブ

健歩移来屋代村。無端停宿旧禅門。連宵風雨平貧睡。多謝壁間羅漢尊。

八月廿七日 月曜 晴

正午十二時発、宇納問村ノ内重^{ジュウズノ}布舎営。

八月廿八日 火曜

早天出發、神門村ノ内ナギ村へ進入舎營

八月廿九日 水曜

午前八時發、大河内村ノ内大藪村舎營

八月三十日 木曜

午前五時多羅木村へ進入舎營

八月三十一日 金曜

午前七時發、免田村へ進入休憩、午前十一時東間村舎營

九月一日 土曜

午前十一時過東間村出發、吉田村ノ内昌明寺村舎營

九月二日 日曜

昌明寺村舎營、記事ナシ

九月三日 月曜

午前八時發、栗野村ノ内木場村舎營

九月四日 火曜

午前三時發、チユウサ郷ノ内松原村へ進入舎營

九月五日 水曜

午前七時發、小野村へ進入舎營、午後八時ヨリ伊集院口石阪山大哨兵

九月六日 木曜

42 石阪山大哨兵

九月七日 金曜

午前六時小野村へ引揚ケ舎宮、午後三時ヨリ鹿兒島神社前大哨兵

九月八日 土曜

鹿兒島神社前大哨兵

九月九日 日曜

午後四時ヨリ左半隊備急隊、右半隊ハ予備隊

九月十日 月曜

前日ニ同シ

九月十一日 火曜

備急隊

九月十二日 水曜

前同断

九月十三日 木曜

午後三時ヨリ鹿兒島神社前大哨兵

九月十四日 金曜

前日ニ同シ

九月十五日 土曜

午後三時ヨリ予備隊

九月十六日 日曜

午前六時ヨリ右半隊ハ備急隊、左半隊ハ予備隊

九月十七日 月曜

午後三時ヨリ第二哨兵線出務

九月十八日 火曜

前日ニ同シ

九月十九日 水曜

午後三時ヨリ第一哨兵線服務

九月二十日 木曜

前日ニ同シ

九月廿一日 金曜

午後三時ヨリ左半隊備急隊、右半隊予備隊

九月廿二日 土曜

前日ニ同シ

九月廿三日 日曜

午後三時ヨリ第二哨兵線服務、明廿四日号砲三声ヲ期トシ城山ノ賊巢ヲ攻撃ス可キニ依リ、本中隊ノ撰抜人名左ノ如シ

中隊長付属 町田政治

小隊長付属 大森品殊 北川勘松

喇叭卒 人見亀吉

兵卒 長谷川柳平 大賀道教 樺沢 赳 川中弥登治 加藤喜三郎

木村義則 成和静雄 村上 勇 伊藤義明 石濱邦守

小林才太郎 野崎重光 三輪保敬 渡辺静一 江原 勉

柳生巖寅 藤田銈藏

計 廿一名

九月廿四日 月曜 晴

各守線悉皆其位置ニ就キ、勉テ静肅ニ警戒ス、午前四時三声ノ号砲ニ依リ開戦、賊巢ノ前後左右ヨリ攻撃ス、攻撃兵ハ各旅団ヨリ各二中隊ヲ出ス、午前八時過ヨリ銃声全ク絶ヘタリ、是レ攻撃隊其目的ヲ達シ賊ノ巨魁以下皆斃レ或ハ降伏シ全滅ニ至ル、然レトモ参軍ヨリ命アリ、本日攻撃目的ヲ達スト雖トモ尚従前ノ如ク守備ヲ嚴ニス可シ

九月廿五日 火晴^マ 雨

第二哨兵線服務、午後三時第一哨兵線へ交代服務

九月廿六日 水曜 晴

第一哨兵線服務

九月廿七日 木曜 晴

此日征討総督有栖川熾仁親王鹿兒島ニ上陸、將校以下皆伺候ス、午後三時半哨兵線引揚ケ小野村ニ舎營ス、是ヨリ

平定ニ復ス

九月廿八日 金曜 晴

小野村舎営

九月廿九日 土曜 晴

小野村舎営、兵卒中村楠蔵桜島軍団支病院〔避病院ナリ〕へ入院ス

九月三十日 日曜 晴

朝食後鹿児島城下平野馬場二百三番地成松八郎左衛門方へ移転ス、軍曹大脇福三郎、小隊付属大森品殊ノ両名桜島軍団支病院へ入院ス、同夕大森品殊、中村楠蔵退院ス

十月一日 月曜 晴

午後軍曹大脇福三郎退院ス

十月二日 火曜 晴

兵卒成和静雄、同岩田庄左衛門桜島軍団支病院へ入院

十月三日 水曜 晴

十月四日 木曜 晴

十月五日 金曜 晴

十月六日 土曜 晴

十月七日 日曜 晴

十月八日 月曜 晴

遊撃歩兵第一大隊第三中隊一等卒

大賀道教

右之者、過ル六月廿五日觀音阪出張ノ際、上官ノ命ヲ不用、慾ニ隊伍ヲ離レ私ニ止宿ニ及候科ニ依リ、戰役中戴罪
 服務申付置候ニ付、凱陣後相当之處分可致ノ処、爾後嚴ニ謹慎ヲ表シ且勤務勉勵ニ付、過日岩崎谷攻撃之節モ其人
 員ニ致加入、旁以無罪ニ取計申度段大隊へ伺出候処、伺之通指令有之候条、為心得此旨相達候也

月 日 遊撃歩兵第一大隊第三中隊本部

十月九日 火曜

十月十日 水曜

十月十一日 木曜 風雨後快晴

午後関根清八郎退院ス

十月十二日 金曜 晴

十月十三日 土曜 晴

十月十四日 日曜 晴

十月十五日 月曜 晴

午後柳生巖寅障子川病院ヨリ出勤ス

十月十六日 火曜 晴

十月十七日 水曜 晴

午前八時鹿兒島乗船、航海中無事

十月十八日 木曜

航海中無事

十月十九日 金曜 晴

神戸上陸、同所一泊

十月二十日 土曜 晴

午前大阪八軒家凱旋、午後解隊

明治十年三月三十一日大阪出發ヨリ

同 年十月二十日 大阪凱旋迄

従軍日数二百〇四日間

同年四月七日木原山開戦ヨリ九月廿七日鹿児島平定マテ

戦時日数 百七十三日間

(後略)